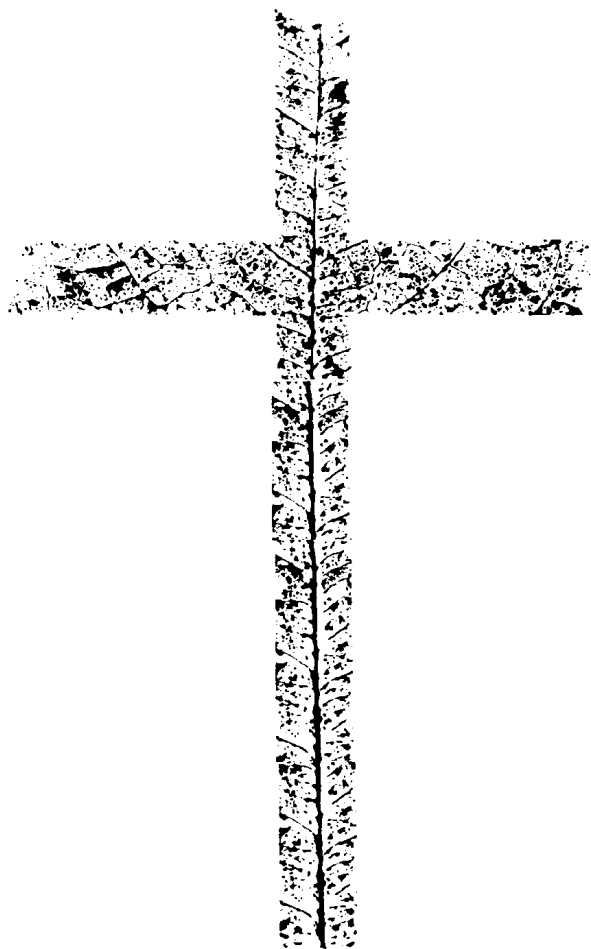


背後の人

有馬頼義

背後の人 有馬頼義



文藝春秋新社

人 の 後 背

昭和三十七年六月十日 発行

定価 三四〇円

著 者 有 馬 頼 義

発行者 小 野 詮 造

発行所 文 藝 春 秋 新 社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

終章	5の章	4の章	3の章	2の章	序章
.....					
198	171	122	94	55	5

裝
幀
加
山
又
造

背後の人

序 章

「お祈りを、いたしましょうね」女は、そう言つて、ベッドの横で、床に膝をついたようであつた。それで、女の顔が、ベッドに寝ている志戸芳雄の顔と、同じ高さになつた。

「どうぞ」と、志戸は言つた。別に、祈つてなんかもraitakuはないが、一分か二分、女の声を書いて、目を閉じていることに反対する理由もない。女は、祈つた。

「主なるイエス・キリストのみに、お祈りの言葉を捧げます。志戸さんは、明日の朝、体内にある、砲弾の破片の剔出手術をお受けになります。志戸さんは、戦地で負傷なさつて以来、ながい間、そのために、苦しんでいらっしゃいました。おろかな戦争のために、生命を失い、また病氣や負傷のために苦しんでいた方の多い中で、志戸さんは、神のお導きで、この病院へ

おいでになりました。明日行われる手術が、執刀の先生、それから、手術に関係のある多くの方々の努力と、志戸さんご自身の平静なお心によって、無事にすみますように、おまもり下さいませ。今晚の、安らかな眠りをも、お与え下さい……」

口の中で、女は「エーメン」と言ったようであった。

女は、立ち上って、志戸芳雄の口の中に、幾つかの、白い錠剤を投げ込み、枕許の水さしから水をついで、志戸の前に、さし出した。

「眠り薬です」

「きくでしょうね」と、志戸は言った。痛みのために、幾晩も眠っていない。

「かならず、お眠りになれますわ」

薬には、何の匂いも、味もなかった。志戸が、錠剤をのみ下すと、女は、コップを、水さしの上へ戻して

「おやすみなさい」と、言った。

「ありがとう」

キリストの愛の力で、手術が成功し、眠りが得られるとは、志戸は、少しも思っていないかったが、女の、白い姿が、カーテンのかけに消え、病室の扉のしまる音が聞えると、自分が、

少し気弱になっていることを感じた。

病室が薄暗いので、女の顔は、よく見えなかった。その薄暗さは、志戸が、入院や、手術の手続きをして、その病室へはいったときと、少しもかわりがなかった。だから、着換えを手伝ってくれた女と、祈ってくれた女が同じ人であるという確信も、根拠もない。志戸の寝ているベッドの周囲は、二方が白いカーテンで、頭の方が壁であり、右側に、ブラインドをおろした窓があるということだけは、わかっていた。志戸は、ひとりになった。眠りという友達が、やって来るまでは。——何か話しかけて、女を、もうしばらくひきとめておくことが出来なかっただろうか。

志戸は、目を開いていた。何を、見ていたというのではない。突然、薄暗い視界の中に、一人の男の顔が、闖入した。

「わたし、ハワイから来ました」と、その男の顔は言った。男は、志戸のベッドの裾の方に当る、白いカーテンのわれ目から、顔だけをつっ込んでいた。志戸は、そのときはじめて、病室が、個室ではなく、二人部屋であることに気付いた。

「へんとうせんを、きりました。きのう、です。まだ、痛みます。あなたは、何処が悪いのですか？」

うるさいな、と志戸は思った。こんな友達は、持ったおぼえはない。

「脚が、悪いんだ」

「車、ぶつかったのですか？」

「いや……」

戦争だ、と言おうとして、志戸は、口をつぐんだ。そんなことを、たった今知り合いになったばかりの二世らしい男に話しても、仕方がない。

「つまり、似たようなものですよ。怪我をしたんだ」

「同情します」と、顔だけの男は、やはり、顔だけのままで、言った。

「ありがとう」

「わたし、日本に、ともだち、一人もありません。しつれいですが、あなたは、何歳、ですか？」

「カルテには、一九一七年生れと書いてある筈だ」

「日本が、パール・ハーバー、攻撃したとき、わたし、子供、でした。アメリカは、ながい、時間をかけて、日本に、勝った。しかし、東京へ、来て、びっくりしました。東京は、たいへん、立派です。日本人も、立派、ですね。それなのに、何故、あんなことをしたのですか」

志戸は、目をつぶった。ハワイから来た男の質問に、これ以上答える義務があるとは思えない。脚が悪いのだ、という志戸の言葉に対して、交通事故か、ときき返したところを見ると、女の祈りの言葉の内容は、ずっと前から、カーテンの向う側にいた筈の、その男の耳には、届かなかったのだろうか。それとも、理解出来なかったのか。それならば、志戸自身が、戦争という言葉を、のみ込んだのに、見知らぬ男の口から、何故、真珠湾の話なんか、飛び出して来たのだろう。

男は、志戸が、答えようとしなくなったのに、気付いたようであった。

「わたし、夜になると、痛みます。少し、うなるでしょう。では、しつれいします。おやすみなさい」

「おやすみ」と、志戸は、答えた。

男の顔が、かき消すように、見えなくなり、となりのベッドが、きしんだ。そして、それっきり、何の音も、聞えなくなった。眠りという友達は、まだ、来ない。

ハワイから来た男は、自分の、うなり声が、志戸の眠りを、さまたげるのではないか、と考えて、話しかけてきたのかも知れない。しかし、同室者のあることを、少しも考えていなかった志戸にとって、その男の出現は、やはり、唐突であった。唐突であったために、志戸の心

から、手術に対する構えや、冷静の装いが消えて、過去がたち上ったようであった。

過去は、——少くとも、志戸芳雄の場合、時が経って、消え去るものではない。二十年も昔に、志戸の大腿骨につきささった砲弾の破片の周囲が、人々が、戦争を忘れる頃になって、くさりはじめたのだ。志戸は、そこにあるその存在を、忘れたことはない。それは、疲れると痛み、貧乏の中で痛み、街に、木枯の吹く頃に痛んだ。痛みは、志戸の一部であり、その痛みにつらなる過去は、いつだって、志戸の心や、血管や、脳のひだの間にうずくまっていた。その痛みのはじまりに、戦争があり、それは、志戸の中で、まだ終ってはいないようであった。癌細胞のように、それは、現実から、記憶の中へ転移し、拡大した。そして、志戸の心が、それに馴れはじめようとしたとき、化膿したのだ。

あのとき、——志戸は、野戦病院の幕舎の中にたてこめていた、異様な臭気を、忘れることが出来ない。衛生兵達におさえつけられ、麻酔もなしに、傷口をたちわられたときに、全身を貫いた激しい痛みは、かたちをかえて、やはり記憶の中に残った。

城壁の上に、歩哨がいた。空は、すき通り、星を、ちりばめていた。兵隊達は、敵が、決して、攻め込んで来ないことを、知っていた。撃って来るだけだ、つり込まれて深追いしてはならない、——そう教えられた。広大な支那大陸は、海洋のようであった。日本軍が占領して

いたのは、その大洋の中に点在する島にすぎない。島と島の間は、兵力で結ばれていなかった。孤島のように、ただ、そこに日本の小部隊がいる、というにすぎない。しかし、その、島を、地図の上で結びつけて、大洋の半分は、日本の占領区域だと、内地に残っている人達は、思い込んでいたようであった。日本の新聞を見つけたとき、兵隊達は、おこった。おれたちは、此処で、身動き出来ないだけじゃないか。実際、志戸の所属していた分遣隊の安全区域は、銀座ほどの広さもなかったのだ。

昼間は、寝た。夜、起きていた。十二時近くなると、きまって、敵は、遠くから撃ってきた。弾薬が惜しい。食糧も、惜しい。そして、一人を失うことは、さらに、惜しいことであった。夜襲は、慢性になった。朝、黄土をかためた城壁の一部分が、少しずつ崩れ、へこんでいた。戦争が終るのと、城壁が崩れ落ちるのと、自分達が絶望するのと、どれが早いか、という競争であった。そして、あの夜が来た。習慣と、予想を裏切って、敵は、大夜襲を敢行した。歩哨の絶叫を聞いたとき、志戸は既に硝煙の中にいた。暗かった。銃が見当らない。厚い、空気の壁につき当り、下半身に衝撃を受け、気を失った。そして、その情景は、短い空白を経て、野戦病院の記憶につながっている。短い、と志戸は、そのとき思っていたのだが、あとになって、救援隊がかけつけ、負傷者が、後方の兵站基地に運ばれるまでに、三日経っていることが、わ

かった。その三日の間に起ったことを、何一つ覚えていない、と言ったら嘘になるだろう。志戸は、黄塵におおわれた空を、車の上で見たような気もしたし、痛みのために、あばれているのを、誰かに抑えつけられたような気もした。病院の幕舎にはいったのは、確かに、夜であった。ランプを、覚えている。えたいの知れない騒音が、そこにはあった。志戸は、その騒音の中から、うわごとと、うめき声と、何か、金属の触れ合う音だけをとらえたようであった。

「おさえつけろ。はなすんじゃないぞ」

その声は、軍医のようであった。メスは、熱のように感じた。しびれて、感覚のなくなっていた脚に、まだ、熱を感ずる神経が残っていたのか、と志戸は思った。しかし、軍医のメスが動いたとき、志戸は叫んだ。

「やめてくれ！ 痛い！ やめてくれ！」

軍医の拳が、志戸の頬で鳴った。殴っては切り、殴っては切り、軍医は、たった一つの砲弾の破片を残して、志戸の脚につきささった鉄片をとり去ることに成功した。

「名医だったな」と、後になって、後送されて、陸軍病院にいたとき、志戸は、仲間に、その話をした。「ともかく、こうして、生きているんだからな」

その仲間は、志戸が兵役免除になり、杖をついて退院する前日に、死んだ。肺結核であった。

目をひらいたとき、志戸芳雄は、自分が、何処にいるのか、よくわからなかった。手も脚も、全く、自分で動かすことが出来ない。動かすことが出来ない、というよりも、手脚を動かす神経が働かない、と言った方が正確だろうか。部屋は、暗くしてあった。少し暑い。しかし、光が全くない、というのではない。志戸は、ゆっくりと、視線を動かした。窓が、見えた。厚いカーテンが引かれているようであった。多分、それがなかったら、志戸芳雄は、夏の太陽のために、目を開いていることが出来なかったに違いない。記憶の断絶が、志戸の前にあった。この情景は、過去の、どこにつながるものなのか。臉は、すぐに重くなった。

志戸は、そのとき、佇んでいるひとの姿を、かすかにとらえた。その方へ手をのばすと、手が動いた。志戸が手をのばしたとき、そのひとの姿が近づいた。志戸は錯乱していたようであった。そのひとは、死んだ妻の、雅代であった。

「あいたかった」と、志戸は言った。

声になっただろうか。そのひとは、黙って、志戸の手を握った。志戸の手は、ひとの手の温度を、確かに感じた。

「何か言ってくれ」と、志戸は、更に、言った。しかし、そのひとは黙っていた。志戸は眠くなった。雅代であったという確証はない。そのひとは、志戸の寝ているベッドと、カーテンの

引かれた窓の間に、佇んでいた。それは確かだ、そのひとの顔が、はっきり見えなかったのは、そのひとが、光を背中に負っていたからに違いない。志戸の意識は、再び、とぎれた。

その次に、志戸が、痛みのために目を開いたのは、空気のよどんだ、夜だ。志戸はうめいた。すると、扉が開いて、白い制服を着た、看護婦が、静かに、はいってきた。よく見えたのは、枕許のスタンドがついていたからであった。

「此処は？」と、志戸は、たずねた。

「個室が、あきましたの。それで、お移したんです」と、看護婦は答えた。

ああ、と、志戸は思い出した。ハワイから来た男と会ったのだ。そこままで記憶が、とぎれてる。

「痛みますか？」

「痛い」

「お注射をうちましょう」

「……………」

看護婦は、部屋を出ていった。

何時だろう。手術は、まだなのか。何故、脚が動かないのか。看護婦が、部屋を出ていつ